

吉良先生に教わったこと

(株) 建設環境研究所・兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 梅 原 徹

はじめに

吉良先生にはずいぶんたくさんのことを教わった。直接の師弟関係にはないから、教えたつもりはないといわれるかも知れないので、私が勝手に教わったと思っていること、著作を読み、そばで見聞きして、これはすごいと感じたことのなかから、記録にとどめておきたいと思うことを綴ってみた。

出会い

1974年9月のことだから、もう37年も前になる。大阪府が明治の森箕面国定公園内に計画していた箕面川ダムの建設がはじまろうとしていたころである。このダムは1969年の計画発表時から、自然保護上の問題が大きいとして、広範囲から反対を受けていた。吉良先生は理路整然と反対論を述べておられた(吉良, 1973)し、高校生だった私も地元の生物研究会に属していて、反対派の一員だった。

環境アセスメントが言葉としてもない時代、建設派と反対派は互いの主張をぶつけ合うだけだったので、結局、ダムは事業者による自然環境の調査もされず、自然の専門家の意見をいれた保全対策も検討されないまま、着工されることになった。そんな折、縁あって大阪府のダム事業担当者から「ダム建設に伴う自然環境への影響を少なくする

ために、今からでも何かできることはないだろうか、できるならやりたい」という相談を受けた。現在では考えられないが、建設直前になってようやく自然保護対策の検討を始めようというのだ。

そんな相談に、コンサルタント業界に足を踏みいれて数年の若造が乗ろうとしたのだから、今から思えば冷や汗ものである。ただ、さすがに自分一人で仕切れるとは考えられなかったので、昔、北野中学で教鞭をとっていた私の父との縁をたよりに、全体の指導を吉良先生にお願いしようと考



図1. 著者の結婚披露宴でにこやかにスピーチされる吉良先生(1978年5月27日)。

えたのは正しかった。私が植物好きで、子どものころから三木茂先生の後ろをついて歩いていたことはご存知だったが、突然の勝手な話を聞いて、すぐに引き受けてくださったのは、父のおかげをこうむったのだろう。これがお目にかかった最初である。

自然の評価－潜在的な回復力

何を保護すべきかを考えるには、まず、地域の自然を知ることからというわけで、ダムの建設地域をくわしく調べることからはじめたものの、横では工事が進められているという、変則的なかたちをとらざるをえなかった。実際の調査は私や地元の研究会メンバーが担当したが、事業者との意思の疎通をはかるために、数年間、頻繁に勉強会、見学会や報告会をもった。すでに相当にお忙しかったにもかかわらず、吉良先生はこうした会にほぼ毎回、出席してくださり、示唆に富む意見をくださった。年次の報告書には毎回、勉強会などでの発言のまとめを書いてくださったが（吉良、1975、1976、1977）、それらは今日でもそのまま通用する内容をもっている。

「自然の評価には生物相の豊かさを考慮すべきこと、とくに昔のおもかげをとどめた生物相は、自然全体がまだ比較的容易に昔の状態を回復する潜在力の指標と考えるべきで、ダム地域は見かけ上、他地域の里山と変わらなくても、潜在的な回復力が高い。こうした自然は、自然公園としての保護に値する」という意見は、当時是一般的ではなく、新鮮だった。

「自然公園として重要なのは、地域に固有な土着の植物群と、それに依存して生活する固有の動物群・微生物群を一体として保存することで、そうした場所ほど環境調節機能、環境改善作用が大きいこと、自然公園の存在意義には、なるだけ豊

かな生物相を保全することと、環境調節機能の大きな自然を保全することによって、より広い地域の生活環境の悪化をふせぐことがある」とされた。また、「利用と保護のあいだに摩擦が生じたら、躊躇なく利用を犠牲にすべきだ」ともされたのは、日本の自然公園の実情と乖離していたが、もっともだと思った。

調査結果にもとづく自然保護と回復の基本方針は、勉強会での吉良先生の発言や、毎年のまとめをもとに、組み立てられたものだといってよい。

自然回復の手助け

何を自然と考え、保護するかをきめた次は、損なわれた自然の回復をどのようにかはかるかである。この時期に教わったのは、「自然らしい自然はみな、数百年ないし数千年の時間の経過の産物で、その復活をはかるのに、数年の単位で早急に成果をえようとするのは無理」なことと（吉良、1979）、「自然の回復は基本的にはその土地の自然がもつ潜在的な回復力にたより、気ながにそれを助けてゆく以外にない」（吉良、1975）ことである。自然回復の材料についてもすでにこの時期、「諸外国の自然公園では、修景作業の材料にもその公園内土着の種類、その土地で採種したものだけを使い、一切の外来植物の導入を禁止しているところさえあることに留意すべきである」と述べられている（吉良、1977）。最近になってようやく、外来種のあつかいに注意がはられはじめたばかりなのを考えると、その先見性には驚くばかりである。

当時、上記の方針に沿って自然回復の手助けとして考えたのが、森林表土のまきだしによる植生回復法（永野・梅原、1980；梅原、2010）だった。当初はダム建設によってできる広大な残土処分地に表土のまきだしによって先駆植生の回復をはか

り、その後、箕面における極相林の復活をはかうとしたのだが、残念ながらこの計画は受け入れられなかった。

吉良先生はこの計画にあたって「ダム湖やダム付帯施設による自然の消失は永久的なもので、取りかえしがつかない。しかし、その損失を別の形でうめあわせることは不可能ではない。それは、完成後のダム周辺の自然を、現在よりもゆたかな、より質の高いものにする努力によって達成されよう」（吉良，1977）と述べられている。これは今日の代償ミティゲーションに相当する考え方で、環境アセスメントさえなかった時代としては、きわめて先進的なものだったといえよう。

この仕事は先生の記憶にも残ったようで、NACS-J 50周年特集、吉良竜夫さんに聞く「自然保護はどこまで前進しましたか」（URL: http://www.nacsj.or.jp/old_database/50/0110/5html 2009. 5 参照）でも思い出を語られている。もっとも、相手が大阪府ではなく、建設省となっているのは先生の記憶ちがいである。

箕面川ダムは貯水池の周辺にできた裸地にだけ森林表土をまきだし、跡地は20年くらい順調に回復してきたが、最近になって後継樹を含む下層植生はシカの食害で一気に衰退した。自然の回復というのは思うにまかせないものである。

吉良先生は終始、土木的な開発は工事そのものをいねいにし、自然回復についてはひかえめにするのを望まれていたが、晩年になって、それさえ必要がないと思える例をみたことを教えてくださった。琵琶湖の北で昔、荒っぽい道路工事によって急斜面が崩れて裸地化し、植生が回復しないのではないかとと思われる場所があったらしい。しかし、20年もたってみれば、到底回復しないと感じられた急斜面に、何もしないのに、立派に植生が回復していたという。ご自身、自然の回復力の大きさに驚かれるとともに、西南日本の場合、

たいていの場所なら時間の経過とともに、少々荒っぽいことをした跡地でも、下手に手をかけるよりは早く、自然が回復することもあると話しておられた。

川の植物

吉良先生は淀川の改修にともなう自然保護問題にも当初からかかわられていた。私が淀川の仕事をすることになったのは1976年以降だが、参考にといただいた別刷（吉良ほか，1974）を読んで、気になったことがある。先生は生態学でも生産生態学がご専門なので、この報告も、ヨシ群落やオギ群落など、淀川の代表的な植生の現存量や群落立地をあつかったものである。ところが、淀川の群落の特徴として、群落の種類組成についての記述があり、「淀川の群落の特徴は、きわめて貧弱な種類組成にある。しかもそのほとんど全部が路傍や畑地の雑草で、河川敷の天然植生の本来の構成種と思われるものはクサヨシくらいで、自然状態を保存していたころの荒川のヨシ、オギを主体とした群落では種数も多く、その内容も雑草とはまったく異なっている」と書かれていた。こうした記述の背景には、優占種だけでなく、群落構成種についても十分考慮されている先生のバックグラウンドの大きさがうかがえた。後に、この記述の背景は、猶原（1945）によるものだを教えていただいた。

たしかに淀川全域をみれば、群落の種類組成が貧弱になっているのはまちがいない。しかし、この記述は数少ない調査区の結果から書かれたこと、現存量の測定には優占種が生え揃った群落が選ばれることなどが影響しており、後に、淀川でも場所によっては河川敷本来の在来植物がかなり残されていることがわかった（梅原・栗林，1991）。「原野の植物」と名づけた河川敷に特徴的な植物

には、出水などによってできた攪乱環境に生える植物が多く、毎年、おなじ場所に生えるとは限らないこと、これらは現存量の測定にはむかない荒れた群落内や縁に生育することがわかったのは、この報告を読んで、ずっと気にしていたことの成果である。

薦められた本

昨今のように古い論文がネットで簡単に読める時代ではなかったので、読みたい論文があれば吉良先生にお願いして、別刷を貸していただき、コピーして読んだ。今でも表紙の右上に、Krのサインの入ったコピーがいくつも残っている。

しかし、先生から薦められた本は2冊だけだった。最初はE.H.Grahamの『Natural Principles of Land Use』、これはお持ちだった本を開いて水際の修復にヤナギの粗朶を使っている写真を見せてくださった。お借りして帰ったが、安かったので、注文して手に入れた。比較的読みやすく、まともに最後まで読んだ洋書はこれくらいである。

2冊目は10年以上後、N.Myersの『The Sinking Ark』だったが、これはすぐにギブアップしてしまった。ずっと本棚のこやしである。

コンサルの仕事

淀川で直接お世話になったのは1976年6月で、河川公園の計画に際してである。淀川河川公園の基本計画は、公園を自然地区、野草地区、施設地区の3種に区分しており、たまたま私が担当することになったのが「野草地区」なるものの計画立案だった。自然地区と施設地区はわかりやすいが、野草地区って何だろう。

困ったときの吉良先生だのみという安易な発想で、箕面ではじめた得意の勉強会を勝手に計画し

た。吉良先生が工学部の高田直俊先生に声をかけてくださり、故、筒井嘉隆先生や淀川の自然を守る会のメンバーまで参加されることになって「野草地区を考える会」を開催した。建設省と守る会はあまりよい関係になかった時代だが、野草地区をどう考えるかという主題からはあまりはずれずに、意見を聞くことができた。

公園の計画、しかも都市公園だから、どのようにして整備するかが議論の中心になる。このときの計画対象は大淀と十三の野草地区だったが、大淀野草地区には自然にヨシのパッチが再生しはじめていた。水もちのよい地下鉄の掘削残土が盛りたてられた場所だったから、しばらくすれば、大部分がヨシ群落になるだろうと想像できたので、自然地区寄りの野草地区にしたいと考えた。整備としてはほとんど何もしない計画だが、公園整備というのは建設事業なので、何もしないでほうっておく計画というのは、事業者にはなかなか理解してもらえない。

そんなとき吉良先生が、「何かすることを考えるだけでなく、何もしなくていいことを証明するのもコンサルタントの大事な仕事です」というてくださった。眼から鱗が落ちる思いで、これ幸いと乗っかり、2年ほど、仕事として植生の回復過程を調査することができた。数年後、大淀野草地区の大部分はヨシ群落に覆われた。

野草地区だから、野草を見せる整備をしたいという意見に対しては、「野草は飼いならせない。野草を育てるのではなく、自然に生えた野草にラベルをつけるなどとして見せなさい」と発言された。これで、おかしい野草を植えなくてすんだ。

先生は後に、整備はもうたくさんという副題のついた小文を発表された（吉良、1992）。琵琶湖畔のヨシ原をつぶして公園化した例をとりあげられたが、淀川をはじめとして、ずいぶんたくさんの整備に腹を立ててこられたことが読みとれる。

これには湖岸のヤナギ林の林床一面に咲くノウルシの写真が使われているが、この林は道路整備で失われた。ちなみにこの写真の右下、近景のアクセントとして写しこまれているのは私である。

コンサルの仕事には現地調査がつきものである。1970年代後半から1980年代は開発がさかんな時期で、滋賀県を中心に、泊りがけでよく調査に出た。そのころは早めに調査をすませたり、後に休みをとったりして半日か一日、近くの自然豊かな場所にでかけることが多かった。多少の後ろめたさもあったので、帰りに琵琶湖研究所に寄った折、先生にそんなことをお話しすると、「それはサボっているのではない。見聞を広めるのは大事なことです。機会があれば、どんどんやるほうがよい」といってくださった。こんなご託宣があれば、鬼に金棒である。あちこち出かけることができた。今ではコンサルはいうに及ばず、研究者でさえこうした融通はきかせられなくなっている。なにごとにもゆとりのない時代になったものだ。

コンサルの成果といえばほとんどが報告書だが、昔は手書き原稿をブルーコピーしたものが多かったから、やたら分厚かった。1975年4月に箕面川ダム調査のはじめての年次報告書をお持ちしたが、厚みが6 cmくらいあった。先生は笑いながら、「コンサルの報告書はみんな電話帳みたいですね。」といわれた。植物など、過去の文献記録を総ざらいしたので、やむをえなかったのだが、見かけで売っていると思われたのではないかと、ちょっと恥ずかしい思いをした。そこで、3年の区切りごとにまとめて印刷した。印刷費はタイプ印刷でも現在ほど安くはなかったので、成果はコンパクトにまとめるように努力した。おかげで自治体発行の報告書にもかかわらず、保存性もよくなり、比較的多くの人の目にふれることができた。

ところがワープロ打ち両面印刷が手軽にできる現在でも、報告書の厚みは昔とかわらない。むし

ろ、より厚くなっている。中身が充実したのだろうか。

植物好き

先生が植生の生産面にかぎらず、個々の種類にまで気をくばっておられたことは、淀川の植生で述べたとおりだが、植物は何でもお好きで、しかもよくご存知だった。

表土のまきだし実験で毎週、大学にお邪魔していたころ、ご自身や教室のどなたかが海外へ出られたときにメモ代わりに作られた押し花や押し葉を広げて、「これ、なんだかわかりますか？」と問われることがあった。こうして *Nothofagus* や *Betula nana* など、聞いてはいても、見たことなかった植物の実物に初めて接した思い出がある。

故、依田恭二先生がアンカレッジから持ち帰られた植物のなかに *Archemilla* があり、「日本にはこの属のハゴロモグサがありますね」とお話ししたら、「日本にも *Archemilla* があるのですか」と驚かれたのには、こちらがびっくりしてしまった。たしかに *Archemilla* は北方に多い種で、日本には1種しかないから、世界を相手にされている方にとっては、日本にあることのほうが意外というのがまっとうな感覚なのかも知れないと思った。

花好きの先生はよく、自宅で咲かせた野生ランの鉢などを大学へ持ってこられていた。私も開発で損なわれる場所にあったユキワリイチゲなどをお届けしたことがあったが、栽培が難しいものは依田先生行きだったようだ。記憶に残るのはタニウツギである。表土のまきだし実験でたくさん発芽したタニウツギの苗を所望されたので、実験の終了時に残っていた1 cm程度の小さな苗をさしあげた。一旦は松原のご自宅で育てられていたが、大津への転居にあたっても捨てずに移しかえられたようで、後年、南郷のご自宅入り口に大株となっ

て育っているのを見て驚いた。花は綺麗だが伸びすぎるので、毎年のように切り詰めなければならぬから、その後はどうされたか。

唯一、守っている教え

仕事にかかわることは別にして、個人的な相談に乗っていただいたことはほとんどないが、愚痴をこぼしたことはあった。40歳になったころから、箕面での仕事などが知られるようになり、ときどき講演などを頼まれるようになった。しかし、求められる内容はいつも同じである。たいした実績がないので、あたりまえなのだが、頼まれるほうは、同じ話ばかりするのはいやになる。そんな愚痴をこぼしたら、「私なんか何十年も同じ話をしている。それは仕方のないことで、同じ話でもくりかえし、しなければならないこともある。そんなときはたとえ図1枚、写真1枚でも、あたらしいのに入れ替えるように努力しなさい」といわれた。



図2. 中国北西部、大同の草原に咲くルリタマアザミ（2011年8月19日）。

10年あまり前から、自分がしてきた仕事内容を若い人たちに講義や演習で伝えるようになった。たとえ写真1枚でも、実際にも写真1枚の場合が多いのだが、毎年、パワーポイントを変えることだけは続けている。

おわりに

自然を見る目を養い、その保護や回復の方針をまとめるうえで、吉良先生の考えかたに大きな影響を受けたことが、いちばんお世話になったことなのだが、それ以外にも、いろいろ応援していただいた。講演やシンポジウムなどのスピーカーとしてのほか、仕事の受け皿としても推薦してくださった。もっとも、これらの多くはずいぶん後になってから知ったので、結局、どれにもお礼を言わずじまいだった。今さら遅いがここでお礼を申しあげておきたい。ありがとうございました。

先生は中国の自然には特別な関心を持ちつづけられたが、26ある省と自治区のうち、半数にしかな行けなかったらしい（吉良，1997）。この夏、認定NPO法人「緑の地球ネットワーク」のご好意で北京の西、山西省の大同を訪れたが、先生はこの地域へ出かけられる機会がなく、残念がっておられたと、事務局長の高見邦雄氏からうかがった。

「先生！ルリタマアザミのお花畑、綺麗でしたよ」。

引用文献

- 吉良竜夫. 1973. 都市公害と自然. 「現代都市政策VI—都市と公害・災害—」（伊藤光晴・篠原一・松下圭一・宮本憲一編），pp. 31—54. 岩波書店，東京.
- . 1975. 箕面の自然と自然保護. 箕面生研会

- 報, 9・10: 5-6.
- . 1976. 天然林は造成できるか—残土埋立て地の緑化に関連して—, 箕面生研会報, 11: 2-3.
- . 1977. 総論, 「箕面川ダム自然環境の保全と回復に関する調査研究」, pp. 10-16. 大阪府. 大阪.
- . 1979. 自然の過保護. 自然保護, 210: 3.
- . 1992. ほんものの緑を守る—整備はもうたくさん—. みどりのトラスト, 5: 1-2.
- . 1997. 中国の植生ところどころ(1) 淮河以北. 京都園芸, 91: 9-19.
- ・末広喜代一・米田 健・小林史郎・永野正弘・中根周歩・野々村誠也・依田恭二・小川房人. 1974. 植物(立地条件等). 「淀川の河川敷における生態調査報告書」, pp. 5-40. 近畿地方建設局淀川工事事務所, 大阪.
- 永野正弘・梅原 徹. 1980. 森林表土のまきだしによる植生回復法の検討. 「箕面川ダム自然回復の促進に関する調査研究」(環境設計(株)編), pp. 6-113. 大阪府. 大阪.
- 猶原恭爾. 1945. 荒川河原植物群落の生態学的研究竝に其の治水植栽と高水敷牧場化. 資源科学研究所彙報, 8: 1-115.
- 梅原 徹. 2010. ダム湖周辺植生の保全・回復とモニタリング. 「ダム湖・ダム河川の生態系と管理—日本における特性・動態・評価」(谷田一三・村上哲生編), pp. 131-158. 名古屋大学出版会, 名古屋.
- ・栗林 実. 1991. 滅びつつある原野の植物. Nature Study, 37: 87-91.

参考文献

- Graham, E. H. 1944. Natural Principles of Land Use. 274pp. Reprinted in 1969. Greenwood Press Pub, New York.
- Myers, N. 1979. The Sinking Ark: A New Look at the Problem of Disappearing Species. 307pp. Pergamon Press, Michigan.

